

黒部川流域では、流域一帯の団体が同じ目線でネイチャーポジティブの実現を目指すため、今年度は共通ビジョンを策定し、今後の活動の共通基盤をつくった

申請者	採択事業名	連携体制	事業テーマ	リスク
東北大学ネイチャーポジティブ発展社会実現拠点	黒部川流域ネイチャーポジティブ・プロジェクト	東北大学ネイチャーポジティブ発展社会実現拠点、富山県、黒部市、入善町、YKK(株)、アサヒグループジャパン(株)、マルハニチロ(株)、関西電力(株)、北陸電力(株)、(株)ほくほくフィナンシャルグループ、(株)熊谷組、八千代エンジニアリング(株)、阿曾原温泉小屋、(一社)環境市民プラットフォームとやま、(一社)黒部川扇状地研究所等	流域ネイチャーポジティブ実現に向けた共通ビジョン策定と地域の自然の理解を深める啓発活動	希少な動植物の減少、将来的な水資源維持への不安、自然の恵みへの関心の低下、コミュニティ維持の困難

取組体制について

■ 体制図

- 東北大学ネイチャーポジティブ発展社会実現拠点（NP拠点）の藤田香副拠点長が発起人
- 黒部川流域の団体が横連携するプラットフォーム「黒部川ネイチャーポジティブ検討会」を2025年4月に立ち上げ、共に学び、共に取り組みを考え、科学データをとるなどの活動を行う勉強会を開始
- 検討会には、自治体（県・市町）、企業、金融機関、市民団体のほか、国の機関（国土交通省黒部河川事務所等）等の30以上の団体が参画
- 2026年度以降、協議会を立ち上げて事務局を設置し、具体的取組を推進する部会との調整を行いながら、共通ビジョンの実現に向けた具体的な目標設定、アクションプランの検討を推進する予定



■ 今年度の取組の工夫

- 多様な関係者が同じ目線でネイチャーポジティブの実現を検討することができるよう、東北大学ネイチャーポジティブ発展社会実装拠点等が作成した手引書を使い、ワークショップ等の丁寧な対話の機会を設けて共通ビジョンを策定
- 黒部川ネイチャーポジティブ検討会に参画する企業の一部において、当該取組の将来的なTNFD開示を検討中
- ネイチャーポジティブな取組と既存のカーボンニュートラルな取組を両立させ、シナジーを生み出すための議論を開始

長期的なビジョンと今後のアクション

高低差4000mの自然の恵みと誇り、賑わいを次代につなぐ黒部川水がつながり、生き物があふれ、人がつなぐ。すごいぞ自然！すごいぞ人の力！

■ 2025年度実施した内容

- 流域一帯の企業や団体の環境保全に関する取組の共有、流域の自然資本の見学
- 流域自治体の総合計画や町のビジョン、農林水産業の現状、水や動植物の現状等の学習
- 流域のリスクと機会を把握・共有し、共通ビジョン（暫定版）を策定

■ 最終的なゴール

- 流域の自治体、企業、科学者、NGO、国の組織が協力し、自然・生物多様性を保全・再生して「ネイチャーポジティブ」を進め、地域価値向上と企業価値向上に結び付ける
- ネイチャーポジティブとカーボンニュートラルの両立、地域のウェルビーイングの実現や、産業や新たな機会の創出を図る。これらを推進するネイチャーファイナンスのあり方を検討し、開発する

■ 今後のアクション

- 「黒部川流域ネイチャーポジティブ検討会」を基盤に協議会の設立を予定。
- 共通ビジョンの実現に向けた具体的な目標設定やアクションプランの検討、部会の調整
- 流域としてのネイチャーポジティブ宣言を発表する。
- 取組具体化に向けてすでに始動している部会の一例は以下の通り。
 - ・希少種復活のための調査（ニホンイトヨの調査など）
 - ・森の保全（自然共生サイトに認定された緑地での遺伝的多様性の調査等）
 - ・地下水の保全（扇状地の水循環と水の伝統・文化の保全）
 - ・地域教育（多様な主体が参画した環境DNA調査）
 - ・里海の調査と保全（海洋深層水と表層水での魚の行動調査、水産物保全）

■ 黒部川流域の取組を参照することが有効な特徴を有する地域

- 流域で一体的にNPを推進したい地域
- 流域一帯で産学官連携がしやすい地域

・黒部川流域は、山森里川海を「水」と「命」でつなぎ、「人の力」が生態系サービスを引き出してきた場所。流域の人々は自然の恵みに依存し、利活用してきた。

・河川水や地下水を活用して電力・エネルギー、製造業、農業を中心とした産業を展開し、「水」と「地域経済」が密接してきた場所でもある

- 黒部川は、標高3,000mの北アルプスから水深1,000mの富山湾の深海まで、高低差4,000mを一気に流れ下る。
- この高低差の中で、上流域は国立公園や国有林として保全され、天然林や風光明媚な峡谷が広がり、イワナやライチョウなど高山の動植物を育てている。下流域の扇状地から河口、海底にかけては豊富な伏流水や深層水が湧き出し、希少魚種のトミヨや、砂礫地で繁殖する渡り鳥のコアジサシが見られるなど、流域固有の生態系が残っている。河口沖の富山湾はズワイガニやブリなど天然の漁場となっている。
- 流域の人々は古くから水の恵みを享受し、時に闘いながら暮らしを営んできた。人々は「清水（しょうず）」と呼ばれる湧き水を暮らしに利用。アルミ、食品飲料、電力、農業などの産業が発展し、自然と共生した暮らしと産業の歴史を紡いできた。
- 自然の保全と利活用を未来に持続させ、流域の賑わいへとつなげることを目的に、流域一帯でネイチャーポジティブな地域づくり「流域ネイチャーポジティブ」を目指している。

扇状地と稲作



生地の清水



湧水地での保全を図るトミヨ



黒部ダム（クロヨン）



立山連峰に存在する氷河



出典) 5点の写真について、以下より引用

“扇状地と稲作”入善町HP (https://www.town.nyuzen.toyama.jp/material/files/group/12/mizunomatipdf_1.pdf)

“生地の清水”富山県HP (https://www.pref.toyama.jp/1711/kurashi/kankyoushizen/kankyou/mizu/oishisa/spot/sp_kurobegawa.html)

“湧水地での保全を図るトミヨ”国土交通省資料 (https://www.mlit.go.jp/river/shinngikai_blog/shaseishin/kasenbunkakai/shouuinkai/kihonhoushin/060711/pdf/ref5-2.pdf)

“黒部ダム（クロヨン）”富山県観光公式サイトHP (<https://www.info-toyama.com/attractions/31038>)

“立山連峰に存在する氷河”立山黒部ジオパークHP (<https://tatekuro.jp/enjoy/photoLibrary.php>)

黒部川NPPは、流域圏内外の団体が集まる検討会の中で地域の自然の現状や相互の取組への理解を深め、暫定版の共通ビジョンを策定した段階。2026年度以降、共通ビジョンの実現に向けた取組の具体化や目標設定を進めていく。

【2025年度の実施事項】

- 黒部川ネイチャーポジティブ・プロジェクト（黒部川NPP）は、**流域の自治体、企業、NGO、アカデミア、国の組織などのステークホルダーが連携**し、自然・生物多様性を保全・再生して「ネイチャーポジティブ」を進め、地域価値と企業価値の向上に取り組むプロジェクト。流域の30以上の団体（自治体（県・市町）、企業、金融機関、市民団体のほか、国の機関など）が横連携するプラットフォーム「黒部川ネイチャーポジティブ検討会」を2025年4月に設立。
- 同検討会では、**参加者の取組の相互理解、現地視察・調査による現状把握**を進めたほか、流域の自治体の総合計画や町のビジョン、農林水産業の現状、水や動植物の現状などの学習も進め、参加者共通の理解を醸成した。
- これらのインプットを通して、**流域のリスクと機会を把握・共有しつつ、共通ビジョン（暫定版）を策定**した。

【2026年度以降の実施事項】

- 地域主体の持続的かつ効果的な実施体制として、「黒部川流域ネイチャーポジティブ検討会」を基盤に、「黒部川流域ネイチャーポジティブ協議会」の設立を予定。事務局も設け、**共通ビジョンの実現に向けた具体的な目標設定やアクションプランの検討、部会の調整、情報収集・発信**等を行う。

【黒部川ネイチャーポジティブ・プロジェクトのゴール】

- 流域の関係者が協力し、自然・生物多様性を保全・再生して「ネイチャーポジティブ」を進め、地域価値向上と企業価値向上に結び付ける。**活動にあわせ、「流域ネイチャーポジティブ宣言」も発表を予定**する。
- ネイチャーポジティブとカーボンニュートラルの両立、地域のウェルビーイングの実現や、産業や新たな機会の創出を図る。これらを推進するネイチャーファイナンスのあり方を検討し、開発する。

2025年度

- 検討会で参加者一体で流域に関する情報をインプットし、リスク・機会を分析し、共通ビジョン（暫定版）を策定

2026年度

- 協議会を設立、共通ビジョンの実現に向けた、アクションプランや具体的な目標設定を検討
- 部会毎の取組を具体化
- 流域ネイチャーポジティブ宣言を発表

ゴール

- ネイチャーポジティブな地域づくりを通して、地域価値と企業価値の向上を両立させる
- 地域での取組を支援するネイチャーファイナンスのあり方を模索し、実現する

共通ビジョンの実現を目指し、個別の活動を部会として推進していく。なお、共通ビジョンは、今後の活動や議論に応じて柔軟に変更を可能とするため暫定版として策定した。

【共通ビジョン（暫定）】

高低差4000mの自然の恵みと誇り、賑わいを次代につなぐ黒部川

水がつながり、生き物があふれ、人がつなぐ。すごいぞ自然！すごいぞ人の力！

- 「共通ビジョンの背景」、「取組の方向性」を付記。
- ワークショップを開催し、黒部川流域への「依存」と「影響」を洗い出し、「リスク」と「機会」を参加者で議論した。そこから出てきた共通ビジョン案を参加者で揉み、共通ビジョン（暫定版）を策定した。また、共通ビジョンの下、目指すべき自然の姿を議論した。これらを基に、共通ビジョンで横ぐしを通すように個別の活動を「部会」として進め、流域のネイチャーポジティブに貢献していく。
- なお、黒部川NPPの発起団体である東北大学ネイチャーポジティブ発展社会実装拠点では、アマタホールディングス（株）とともに、「ランドスケープアプローチ」という考え方にに基づき、自然の保全・回復と地域の価値創造を同時に目指す個人や組織を支援するための実践ガイドである「地域のネイチャーポジティブ活動の手引き Ver.1.0」を公開しており、同手引きをワークショップの議論でも応用した

地域のネイチャーポジティブ活動の手引き（東北大学NP拠点等）



第4回（2025.12.22）に行ったワークショップの様子



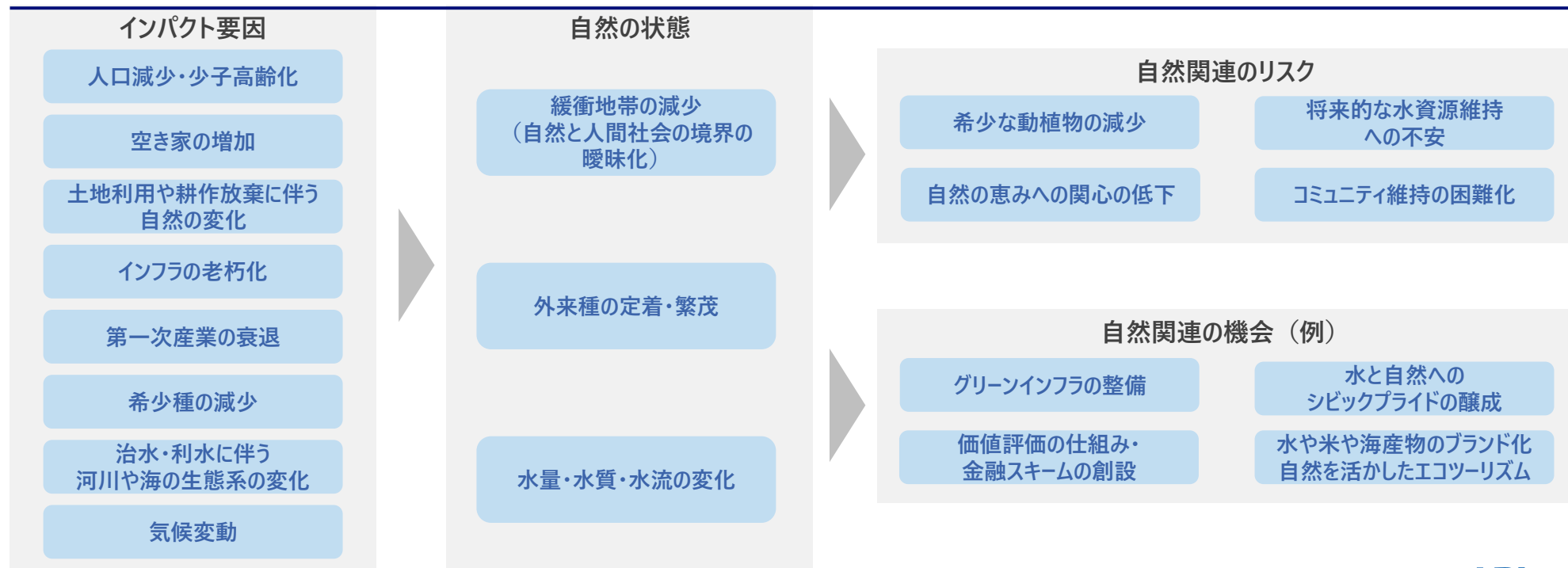
第2回（2025.7.22）の勉強会に集まったステークホルダー



ワークショップでは、検討会参加者で、黒部川流域が今後抱える“リスク”と“機会”を議論。リスクとして流域の希少な動植物の減少や水資源維持、人口減少・少子高齢化によるコミュニティ維持の困難化が挙げられる一方、機会として自然を活かした新規産業の可能性や新たな金融メカニズムの検討などの意見が出された

- 黒部川ネイチャーポジティブ検討会の第4回として実施したワークショップにて、黒部川流域が今後抱える“リスク”と“機会”を議論し、共有を行った
- 他地域と同様、気候変動による将来的な河川の水量や地下水量の減少、希少な動植物の減少に加え、自然に関心を持ち触れ合う人の減少もリスクである、との意見が出た。一方、水や農作物や海産物のブランド化や自然を活かしたエコツーリズム、新しい金融メカニズムの検討など新たな機会も挙げられた。

第4回（2025.12.22）に行ったワークショップで上げられたリスクと機会の整理

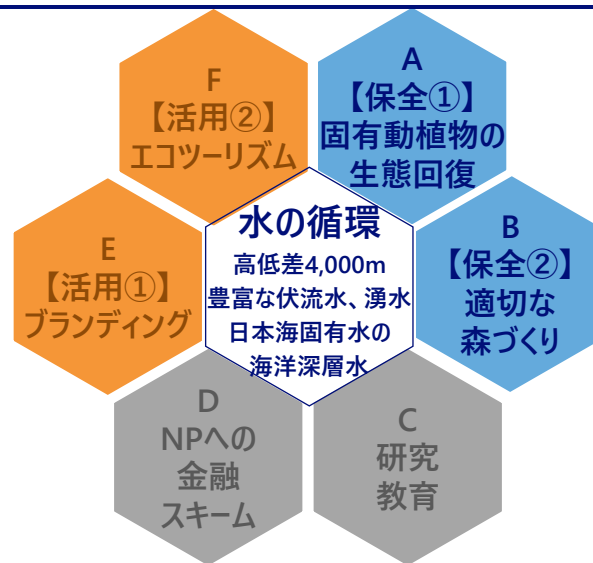


共通ビジョンの下、希少種の保全・復活や生息環境の改善、観光などの自然の活用、ネイチャーファイナンスの開発等のNPな取組の推進に向けて動く

高低差4000mの自然の恵みと誇り、賑わいを次代につなぐ黒部川



黒部川の水の循環に紐づく多様な取組（一例）



エコツーリズム（取組例）

- ① 自然保全・再生を取り入れたNPツーリズム開発
- ② 峡谷ルート×自然再興
- ③ NP×健康、NP×海の幸

製品のブランディング（取組例）

- ① 海洋深層水使用の商品ブランド化
- ② 環境配慮型農業の推進
- ③ 水力発電などの自然エネルギーの活用

金融スキーム（取組例）

- ① ネイチャーポジティブファイナンスの検討

固有の動植物の生態の回復（取組例）

- ① 黒部川流域の固有種、希少種の生息の回復
- ② やすらぎ水路等の川辺のグリーンインフラの整備
- ③ 藻場造成等や海の自然共生サイト登録の検討

適切な森づくり（取組例）

- ① 水源涵養・水質保全・生物多様性保全の各機能を森林が保持するための保全活動

研究教育（取組例）

- ① 環境DNA調査・生態系調査
- ② 教育・人材育成（地元の学校と連携等）

黒部川ネイチャーポジティブ・プロジェクトは、流域の上流から河口で関わる多様なステークホルダーが一堂に会して取組を推進するため、相互理解、合意に基づいたビジョンの策定を優先

<2025年度取組プロセス>

25年秋頃

25年冬頃

25年度末

インプット

【関係者で共通の知見をインプット】

- 本プロジェクトは、1つの河川の流域で暮らし、事業活動をし、研究する様々な関係者がネイチャーポジティブな地域づくりに向けて協働するもの
- まずは、流域の現状、自治体や住民、各産業の置かれた状況や、関係者相互の環境配慮の取組、行政計画におけるネイチャーポジティブに向けた取組を勉強会の中で共通認識としてインプット

25年春から夏

体制の全体像・取組内容の検討

【体制や取組1つ1つの連動性を検討】

- 黒部川流域で、共に活動する自治体、企業、金融機関、地元団体、アカデミアを掘り起こし、検討会を設置して体制を構築
- 全体の運営方針に加え、ステークホルダーの個別の取組内容を共有し合う
- 現場の活動場所を共に視察し、交流と理解を深める

関係者間でのリスクと機会の特定

【東北大学NP拠点公表の手引きの活用】

- 東北大学NP拠点が公表している「地域のネイチャーポジティブ活動の手引き Ver.1.0」は、「ランドスケープアプローチ」という考え方に基づき、自然の保全・回復と地域の価値創造を同時に目指す個人や組織を支援するもの。ワークショップを開催し、手引きに沿って、黒部川流域への「依存」と「影響」を洗い出し、「リスク」を特定した

関係者間での共通ビジョン協議

【今後の活動の軸となるビジョン】

- 様々な関係者が集まり、黒部川流域への「依存」と「影響」を洗い出し、「リスク」と「機会」を参加者で議論し、流域の共有ビジョンを定めた
- また、共通ビジョンの下、目指すべき自然の姿を議論した
- 今後の活動や議論に応じて柔軟に変更を可能にするよう、暫定版としての共通ビジョンであるとして合意した

次年度に向けた体制づくり

【具体の取組毎の部会の立ち上げ】

- 流域一帯のネイチャーポジティブな地域づくりは地元が主役
- そのため、地元関係者を中心として、共通ビジョンで横ぐしを通すように個別の活動として部会が設立され、活動が始動している
- 年度末の第5回（2026.2.18）では、協議会設置の計画や、各部会への参加を促すような具体的な取組の情報を共有した

ネイチャーポジティブな地域づくりにあたっては、自然の保全と活用の取組の複層的な実施により、地域経済循環を生み出し、持続可能な取組の運営体制を構築することが重要

■ ランドスケープアプローチによるネイチャーポジティブな地域づくりに対する総括（モデル支援を通して）

複層的なネイチャーポジティブな取組実施

- ネイチャーポジティブな地域づくりには、『自然保全』と『経済活動（活用）』の連携が不可欠
- 活用事業は自然保全への寄与を前提とし、その収益を保全活動へ還元する持続可能なスキームを構築することが重要

地域経済循環につながる取組か

- 行政や地元関係者の負担に依存した体制では、ネイチャーポジティブな取組の持続可能性は担保が困難である場合がある
- そのため、地域内外からの投融資や自然資本活用事業の収益を、保全活動へ還元する事業スキームを検討します。これは、地域の負担を軽減しつつ自律的な運営を目指すものであり、地域ニーズに即したあり方と言える

スモールスタートも1つの手段

- 基礎自治体ごとに、抱えるリスクや社会課題への対応優先順位は異なる
- そのため、喫緊の課題認識を共有できる自治体・団体と連携し、自走可能な最小限の規模で活動を開始（スモールスタート）することが、事業の柔軟性を確保する上で有効